

『梅屋敷の記——名このはな』

大阪府立中央図書館

安達 明子

宇円田 陽子

小笠原 弘之

北川 敬子

佐久間 素子

高崎 秀美

日置 将之

佐藤 敏江

八木 美恵

大阪府立中之島図書館

このはな

武蔵忍藩 黒澤翁満先生書

梅屋敷の記

平廻家蔵書

浪花津に咲や此花と詠りけん昔の風は吹も傳へさめれと、今も梅の木ともいと多く植渡して、花の頃はかをりなつかしき所あり。世に梅屋しきとなんいふ。生玉のみやしるよりは東、四天王寺よりは北の所也けり。いかて見まほしとは誰も思ひなからに、猶打のとめられて遇しかちなるを、ことしくうけの三年というきさらきの十日八日、西田の直養かもとよりせうそこして、まのあたりかたらふへき事なんある。かならず今日をすくさてとやうになんいひおこせたるを、なその事そとてゆきて見たれば、あるしけふは加納の諸平と小林の大茂か爰にしもくなるを、おなしくはかいつらねて梅見に行んとなん思ふはいかにといふ。はやく思ひつる事をいと嬉しとなん聞みたるに、諸平きにけり。大茂はあしわけ小船にて、とみにはえなんとせうそこしたりければ、さらはあとよりおひしきぬへくちきりおきてゝ、いとあわたゝしうみたりたち出たるは、申の時にも猶おくれたるへし。すさともこれかれみたりよたりみて、その門の前より舟にのりてとさ堀をさかのほらす。舟人いへらく、時はいたうおくれたり。さす方は遠し。おん船はてなん程には、日も暮なんとすらんといひて、いとわひしと思ひたるを、すさともけしきとりていそかすもかし。直養はやう心しらひして、ひわりこ、つかさね、さゝえやうのものよういしたれば、船の内に取りちらして、酒のみものくひつゝ、何くれの物語りす。をりしも、今日はひなくもりとかや、古ことおほえて、いとゝ霞める空のけしきに、さゝ波よする川風の岸の柳をゆら／＼と吹なひけたるなど、いはん方なし。むつふるとちかかたみに酔ては、いとゝ心に残

す事なう、さえのかた歌の、かたわれたけく打かたらふ。いみしう面白し。船は西のよこ堀を南にをれて、道頓堀を東にやる。けに舟人かいへりけるやうにはてたれば、やかてくれにけり。そこより火ともして、ゆふやみは道たとくしなと打すしゆく。かやはかくるゝとおとろかし顔に、えならぬ風の吹すさふは、近つきやしたると嬉しきに、いと大なる門ありて、竹垣ひろらかにしめくらしたり。これなんさす所也ける。もろをり戸めきたるをおしひらいていれたり。くらければさたかならねと、たてもぬきも二まちにも猶あまりたらんと見ゆる庭に、梅ならぬ所もなく、近き梢はうす白みて、やみにも色の見えすしもあらず。香は空たきのやうになんみちたりける。直養

さきつゝく梅のひかりにやみの夜もたそかれ時の心地こそすれ
なといふ／＼猶奥深う下かけをあゆめは、やり水に棚はしわたして、石とも多たてたり。所々の小柴垣、とうろの姿さへいみしうえんにて、あくらたつものこゝかしこに並ひ、あつまやたつものなとも見えたり。もやにはひさしあり、はなちん傳あり。けうらをつくしたるまらうとゐ、ひとましめて人々のほる折にあひて、大茂もきつきぬ。めつらしうくはゝりたれば、物語ともゝ又改りてたのし。時に大茂

川風のはやきかをりのなかりせは水上遠き梅を見ましや

となんおくれたる心なるへし。いみしうそうそきたる女とも二人、へいし、かはらけもて出たり。つほけしり、さらやうの物までも、いとなん清かりける。われも人もひた物のみて、いたく酔たり。直養かいへらく、かうつとへりけるよたり、まると大茂は今は浪花人のやうなれと、おのかしゝの故郷をいへは、まろは豊国の道の口也。大茂はいなは也。諸平は紀、翁満はむさし、四方四国なるも、ちきりあやしからしやはとて、

ぬは玉の夜はあくとてもよもやまのものかたりをそなすへかりける

といふをうけて、諸平、其四方の国の四人か酒をのむ事も、おとらすまさらず、かたみに上にたゝん事かたく、下にたゝん事かたくなんあるへきといへは、人々とよみて、はどうちわらふ。女ともゝいたうみたれて、昔梅の花のをとめになりて、夢にかたらひし古事も侍りとかや、かすならねとも、今やうひとかなてまひさふらはまし。きんたちうたひてたまはらしやなど、やう／＼にくつし出たるを、大茂手かきて、あなかまたまへ。おもとたちはしはし北おもてにゆきたれ。爰にはいとなんやくましきを。といへは、しゝま／＼と口おほひたるもをかしと見るに、きんたちは世の人にも似すおはしますかな。ひるこそ千五百ともなくまうき侍れと、誰かはよるの梅見にき侍らましとわらふ。直養いなとよ、心もて見んに夜なれはとて、何かははた此物いふ梅の花は殊更にも夜こそはと打たはふるゝ

に、女どもは其心をえぬ成へし。諸平かたへより、くほの名をは何とかいふつらたり、けふくなど打すして、諸聲にわらへとも、猶其心をえしらねは、何事をいふらんなと思ふらん顔持してひきそはみをり。それをかしていとゝわらふ。大茂女の袖をひかへて月まちてゆかせと人のかこたてもやみに残さんそのゝ梅かは

いさとて東おもてのさうしおしあけたれは、いつの程にかみまの月たかうなりぬ。人々おとろきてはし近う立出て見るに、今唯今いこま山の峯をはなれて、霞める空よりほのゝしう梅の梢に影さしたるけしき、いはん方なう、花の色の見えそめては香さへそはれる心地して、いとゝ唯ならぬ夜のさま也。直養

香はかりと思ひの外にうれしきは梅のほつえの春の夜の月

大茂

くみかはす霞もしはし空にきえて梅かえわくる月をみるかな
おのれも

大かたはおほろにかすむ月かけのなと梅にのみさやけかるらんなと詠ちらしてなほ見捨かたけれど、夜も更ぬ也。今はまかりなるとて人々おりたつ。あるし花の枝ともふさやかにたをりて、家つとにとて出したり。やかてすさにもたせたれは、道のおひ風猶えんなるもをかし。舟のとまにさしたるをみて大茂

ふきそへしを船のとまの梅かえにかけうかみてもおくる月かな
となんいへりけれど、誰も酔てよます成ぬ。さこそあれと、ひるの残りは猶忘かてにとうてしめたり。酒にしみなんといふもあれは、猿にかもなど爪はしきするもありて、いとゝ帰さはみたれにけり。酔のすさひにおもひよりて、浪花人ふたりかいふやう、今日の事のちの思ひ出くさにせはやとなんおもふをとて、諸平にはしかきせさせて、おのれに道の記せよといふ也。いたく酔たれはよろつ忘れたるをとわふれと、ゆるさねはいかゝはせん。さらはとてありつる、かくやよみしなど、したならず。はしに舟人の聲にて、おん船はてゝさふらふとなんいふ。

弘化三年二月十八日 翁満記